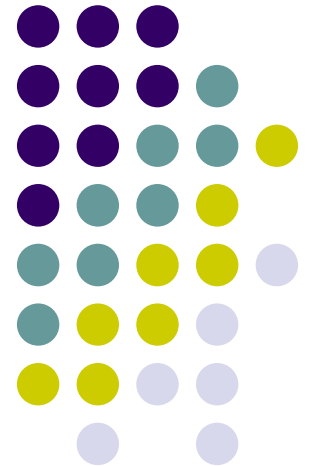


中国西南民族史

7. 南詔国の再帰唐と 白族の形成 (8c末 ~ 9c前半)

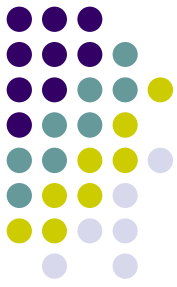


安史の乱(755～762)後の唐王朝



- 節度使(元来は辺境防衛のための軍事施設)を内地にも配置
- 単に大きな兵権を保持するだけでなく、広域の地方民政・財政権を持つ
「藩鎮」(はんちん)

唐後期の藩鎮



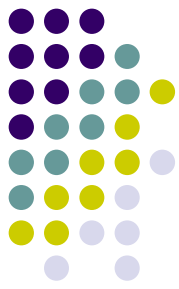
- 『アジアの歴史と文化』(同朋舎出版, 1995)
p.160の地図などを参照してください



藩鎮と唐王朝

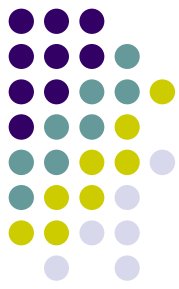
- 中央から自立の傾向を示すものも出現
「**反側の地**」(特に東北部)

「**順地**」(主に江南) 唐王朝の経済基盤
- 藩鎮の抑圧と財政の立て直しが唐王朝の
国内的課題
780 両税法



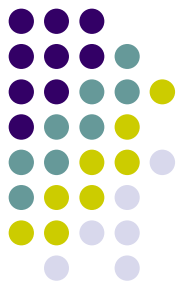
徳宗－李泌の対外政策

- 徳宗(在位779～805)
両税法施行後、藩鎮の弾圧をはかるが失敗
- 対吐蕃政策：宰相李泌の建言(787)(史料7.2)
回紇・雲南・大食・天竺と結び吐蕃を包囲攻撃
- 同年、西川節度使韋皋(いこう)が着任、雲南へ
書信を送る(史料7.1)
李泌の策と連動か



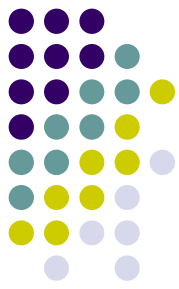
雲南側の事情

- 吐蕃：唐に対する軍事行動のたびに雲南から兵員・物資を調達「雲南これに苦しむ」(史料7.1)
- 亡命漢人の鄭回、清平官となり南詔王異牟尋に唐への帰順をすすめる。
- 四川南部の少数民族「東蛮」を仲介とした韋皋とのやりとり(787～792)(史料7.1～7.3)
吐蕃との関係悪化(唐使の雲南滞在を知られる)



再帰唐の実現 経過

- 793 ~ 794 異牟尋、正式に唐への帰順を願う書信を送る(史料7.4)
- 794 祠部郎中袁滋が冊南詔使として雲南に赴き、異牟尋を南詔王に冊封(史料7.5)金印(「貞元冊南詔印」)を与える(現存せず)
- ただちに対吐蕃共同作戦開始雲南の吐蕃勢力を金沙江以北に駆逐(史料7.6)



再帰唐の実現 構図

吐蕃 南詔国

- 「贊普鍾」「日東王」の称号を与えるが、実際は属国扱い(人員・物資の徴発)
- 雲南西北部に直接進出、反蒙氏勢力(旧三浪詔など)も支配下に置く

唐 南詔国

- 安史の乱後、雲南に直接進出する余裕はなし
- ただし韋皋の元で西川節度使は軍閥化、吐蕃に対抗する強力な軍事勢力となりうる(史料7.9)



再帰唐の実現 構図

唐 南詔国

- 安史の乱後、雲南に直接進出する余裕はなし
- ただし韋皋の元で西川節度使は軍閥化、吐蕃に対抗する強力な軍事勢力となりうる(史料7.8)

韋皋 南詔国

- 対吐蕃戦の必要性から南詔国を優遇(史料7.9)
- 連年の朝貢使節受けいれ(史料7.10)
- 高官子弟の成都留学



再帰唐の実現 構図

南詔国 唐

- 唐の軍事力を借りて吐蕃に対抗
- 唐の冊封を受けることで蒙氏王権の裏付け
 - 吐蕃との対抗上
 - 国内の対立勢力への対抗上
- 唐の先進文化を積極的に吸収



南詔国の国都

739 太和城建設

764 **陽苴咩城**(ようしょび) 建設・遷都

(太和城北15里)

- 陽苴咩城の北40里に大釐城
(もと「河蛮」の城邑、皮羅閣の時占拠)
- 洱海の南端・北端に龍尾城・龍口城
- 龍口城の北15里に遼川城 (史料7.11)

都城に対する二重三重の防備

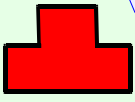


澄川城 

龍口城 

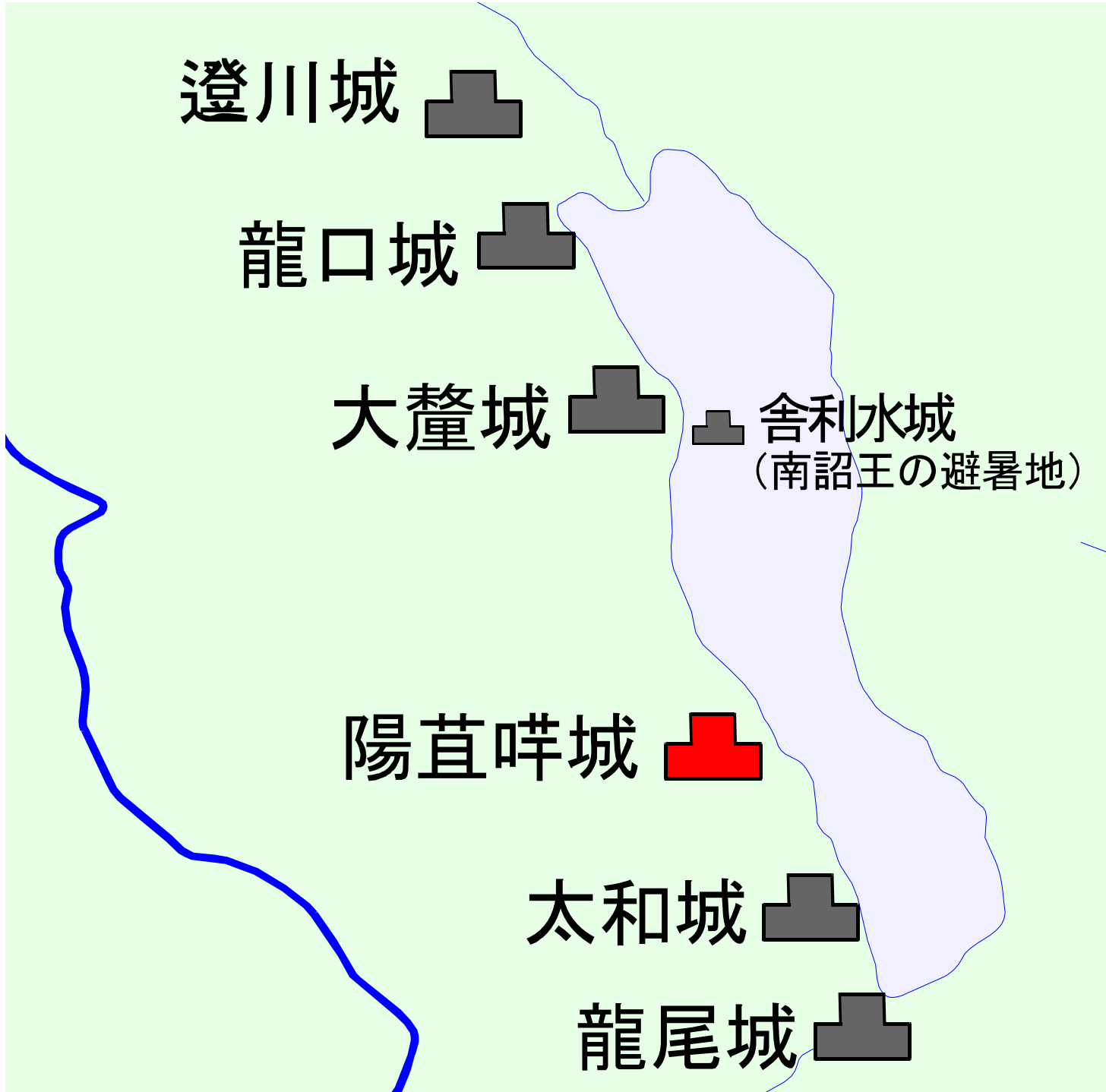
大鰲城 

舍利水城
(南詔王の避暑地)

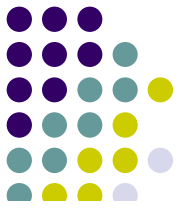
陽苴咩城 

太和城 

龍尾城 



大理城(陽苴咩城)の南門 (現存する城壁は明清のもの)





龍尾城の城門





首都地区住民の多様性

- 蒙氏(哀牢人?)を初めとする**烏蛮**
- 洱海東南出身の**西洱河蛮(白蛮)**(重臣層を構成)
- **河蛮**: 洱海西岸の先住民
- 強制移民させられた**周辺民族**(の上層部)
- **漢人**: 漢代以来の移民の子孫
鄭回を代表とする流亡漢人
天宝期の唐軍の逃亡兵



共通の言語・文化の形成

- 多様な住民の間に共通の言語・文化の必要性
「言語の音は白蛮が最も正しく、蒙舎がこれに次ぐ。それ以外の諸部落はこれに及ばない」

(史料7.11)

漢人による記述：「最正」= 中原漢語が基準

- 上層の共通語 = 漢語 + 民族語語彙
「但し物の名前は漢 (= 中原) と違う」
- 中下層の共通語 = 民族語 + 漢語語彙 (?)



共通の言語・文化の形成

- この時期に漢語が大量に流入したことは確か
現代白語(大理白族の言語)の基本語彙の70%は漢語
起源、そのうちに唐代音もかなり含まれる
- 言語以外の文化面でも漢文化を基本とする
 - 白蛮文化 = 古くから漢文化の影響を受けた洱海
地区の文化(白蛮自体が漢族移民の子孫?)
 - 支配階層の子弟が大量に成都留学
 - 鄭回の役割



白族形成の開始

南詔国後期・大理国期 (9世紀後半～13世紀前半)

- 洱海地区で白蛮・烏蛮の名称が使われなくなる
次第に民族間の区別が意味をなさなくなり、
共通の言語・文化を核として一つの民族に融合



元代：「白人」「僰人」
現代白族の直接の祖先
(史料7.12)